

小学校における教育課程のあり方について：低中学年の指導を中心として

2020年8月24日 無藤 隆（白梅学園大学）

1. 現今の学習指導要領における小学校特に低中学年のあり方について

○小学校を含む学校教育の教育課程はその中核に資質・能力の三つの柱の育成を置いている。個々の教科等は個別の単元の目標さらに教科等の見方・考え方を通して資質・能力を育成するという長期的なねらいを確保する観点からとりわけ小学校低中学年を見直す必要がある。その際、学習指導要領および中央教育審議会答申の特に関連するところから出発することが適当であろう。

○中央教育審議会答申（平成28年12月21日）の「第2部 各学校段階、各教科等における改訂の具体的な方向性 第1章 各学校段階の教育課程の基本的な枠組みと、学校段階間の接続 2. 小学校」において、小学校教育における現状の課題について触れている。

「低学年においては、学習の質に大きく関わる語彙量を増やすことなど基礎的な知識・技能の定着や、感性を豊かに働かせ、身近な出来事から気付きを得て考えることなど、中学年以降の学習の素地を形成していくとともに、一人一人のつまずきを早期に見だし、指導上の配慮を行っていくことが重要となる。中学年は、生活科の学習が終わり、社会科や理科の学習が始まるなど、具体的な活動体験を通じて低学年で身に付けたことを、より各教科等の特質に応じた学びにつなげていく時期である。例えば国語科における言葉の働きについても、低学年における「事物の内容を表す働き」等に加えて、「考えたことや思ったことを表す働き」があることに気付くなど、指導事項も次第に抽象的な内容に近づいていく段階であり、そうした内容を扱う学習に円滑に移行できるような指導上の配慮が課題となる。高学年においては、子供たちの抽象的な思考力が高まる時期であり、教科等の学習内容の理解をより深め、育成を目指す資質・能力の育成に確実につなげるためには、指導の専門性の強化が課題となっている。定期的に文部科学省が実施している「教育課程の編成・実施状況調査」の結果を見ても、理科や音楽などを中心に、特に高学年において、専科指導を行う学校の割合は年々増加しているところである。こうした専科指導の充実、子供たちの個性に応じた得意分野を伸ばしていくためにも重要である。」

○小学校低学年教育については学校等間の接続として学習指導要領総則篇に改革の方向を述べている。「幼児期の教育との接続及び低学年における教育全体の充実（第1章 第2の4の(1)）」にこうある。

「(1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の

工夫や指導計画の作成を行うこと。」

2. 認知的能力と非認知的能力について

○資質・能力の育成を巡り、近年の世界での研究は、主に認知的な能力・スキルと非認知的能力・スキルとして整理して検討することが増えてきた。大まかに対応付けるならば、知識・技能と思考力・判断力・表現力等は認知的な能力に対応するだろう。それに対して、学びに向かう力等は非認知的な能力に対応するだろう。

○小学校入学前の認知的な能力と挙げられる中で小学校教育と直結するのは、

- 1) 話し言葉の力（と文脈を超えた言葉の使い方への気付き）、
- 2) 数量的なセンス（数十までの計数や量の比較）、
- 3) 回りの環境における事物の特徴への気付き（科学的な理解の芽生え）、などである。

○非認知的な能力は大きく3つにまとめられる（OECD その他）。

- 1) 物事に積極的に関わろうとし、自分の目標を迫する力（粘り強く取り組む）。
- 2) その際、目標に向けて自己の調整を図る（認知的情動的な働き）。
- 3) 他者と協働する。

この非認知的な能力は幼児期に特に伸張し、さらに学童期・思春期と伸びていく。学校教育とりわけ授業での学習はこの非認知能力の基礎が形成されていることが大きく影響する。それが学習への姿勢を形成する基になるからである。

3. 言語と数量の発達の特徴と日本語としての独自性

○言葉の学びやその中の文字の学習、および算数の計算の基礎部分については、日本語および日本文化は比較的それらの入門期の学習に有利に働いているようである。

○幼児期の話し言葉の学習では、

- 1) 子どもと大人との言葉によるやり取り（子どもがその時に興味を抱いていることを巡っての対話）、
- 2) 絵本の読み聞かせ（親や幼児教育での）、
- 3) 言葉遊び（語彙を分解するので）、などの機会の豊かさが重要である。そこでの家庭格差がかなり大きいので、幼児教育の働きは底上げとして意味があるだろう。

○幼児期に日本語の文字（かな文字）の学習の基礎がかなり進んでいる。

- 1) 小学校入学前に大部分の子どもはひらがなを一字ずつならほぼ読める（特殊音節は難しい）。これはアルファベットを使う言語よりかなり有利である（その代わりに日本語は小学校高学年以上になると文字の種類が増えて学習が難しくなる）。
- 2) 環境において文字に触れる機会が豊かにある（特に幼児教育施設においては）。
- 3) 絵本などの読み聞かせと一人で見ると組み合わせられることが多い。
- 4) しりとりなどの言葉遊びは単語を音節に分解しひらがなの対応を分かりやすくする。

○幼児期の終わりには数量の感覚（センス）がかなり進んでおり、筆算への土台となる理解が成り立つ。

- 1) 小学校入学前に大部分の子どもは数十以上の数を実際の物について数えることができている。
- 2) 見えないものも数えるようになる（縄跳びの回数とか走る速さとか）。

3) その計数には暗黙に足し算・引き算の基礎が含まれる(ただし物の動きに支えられた暗算)。

4) 数えることによる比較と量の比較が対応することの理解が進む(これが心的な数直線の形成となっていく)。

4. 基礎的な学力とは

○基礎学力として語彙や文字の読み書き、また数量の計算を含めて、今後の学習の素地・土台となるものは幼児期の学びからの発展として多岐にわたる。低学年では学びの素地の形成であり、中学年では各教科等における見方・考え方の始まりであろう。それは特に資質・能力の育成まで展望すると、以下のようなことからなるのではないか。

○学びの自覚化が成り立ち、学習活動への姿勢が育つこと。

1) 教師の課題を長い目で自己学習の課題として受け止め、位置づけ直して、理解する。

2) 学習という分からないことから分かること・できることへの目標に向けて短い時間での集中をする。

3) 対話を通して今の学びを広げ深める(単なるおしゃべりでなく、また子ども間で並行した教師との問答でもなく)。

○知的な学習の内容的な基礎が整うこと。

1) 言語能力とりわけ(広義の)語彙力を広げる。これは極めて多数の語彙(単語や言い回し)をその意味や文脈と共に学ぶことであり、生活のすべてが関わる。

2) 数量的センスを数学的課題の把握と立式に活かし、確実な計算方法のスキルの習熟を進める。計算の手順と共に、その計算の根拠を理解して、数学的な見方として事態を捉える。

3) 中学年以降に向けて、教科等の基礎となる気づきを体験や読書や対話から学び、身の回りでの知的関わりをする。

5. 学力格差にいかに応じるか

○すでに幼児期に(おそらくその前から)子どもの家庭での知的な刺激(親との言葉のやり取りや絵本など)に違いが大きい。その結果として小学校入学前の語彙の個人差はかなりある。語彙以外の面での知的な発達の個人差や学ぶ姿勢(学びに向かう力)の個人差もかなりあるだろう。

○幼児教育はその底上げを図っている。

○小学校特に低学年での語彙力(言語能力)や数学的なセンスさらに学びへの意欲や姿勢の個人差もかなりあると思われるが、その是正を通しての底上げがどこまでなされているのか。どうすれば可能なのであろうか。子どもの学力を見定めての個別的な対応の重要性が示唆されよう。

6. 小学校低中学年での重点的な指導で必要なこととは

○小学校低学年中学年での学校としての必要な指導とは主になんであろうか。これまでの分析と様々な研究や実践を元に以下に整理する。

1) 学級集団としての居場所と学びを育てる。何より子ども特に年齢の低い子どもは学校に

居て安心し、友達と触れ合い、共に活動することを楽しく感じる事が成り立ち、始めて学習活動へと進むことができる。

2) 言語能力の育成は教科国語、読書、家庭などでの読み聞かせ、言葉遊び、すべての時間での言語的やり取りなどを通して、それぞれの現実のあるいは仮想の文脈での言葉の使い方を学ぶことで養われる。とりわけ教科国語は言葉の自覚的な使い方を学ぶ。語彙を大量に増やすのは読書や各種の言葉を用いたやり取りによる。

3) 国語、算数、探究(体験からの学び、調べ学習、などを問いとそれを巡る情報群のまとめとして整理し討議する)などの教科の時間がとりわけ低学年などにおいて学校教育に参与し学習活動を続けるのに不可欠なこととなる。

4) 基礎的体力・運動力の確保また体育・音楽・図画工作などでの技術的習熟と活用の喜びと充実感を味わう。特に当該の活動の楽しみを通してなにがしかのセンスが得られることと、工夫をしつつ努力をして目標を達成する経験が重要になる。

5) 学習方略の多様化と自覚化(とりわけ中学年以降)を進める。どういう目標でどういう教材についてどのような理解等を成し遂げようとするのか、その際、自分がすでにできている・分かっていることは何か、等のことに応じて多種多様な学びの工夫を試みる経験をする。とりわけ中学年以降に重要になるだろう。

6) 家庭やそれまでの学習経験や月齢差などによる学力の差について、個別的な補習などによりその学習活動に必要な最小限の部分に追いつくような指導を行い、その後の学習の継続の土台を形成する。

7) ドリルによる習熟はスキルについて不可欠であるが、単なる反復ではなく、工夫した学びを可能にするための支援を AI にサポートされた ICT の活用に進めることなどが望まれる。そのための学習センターなどの利用を放課後に可能にしてもよいのではないか。

8) 学校外の学校の教育課程に入っていないことについての学びの機会を広げる。子どもが成長し大人になるまでに学びたいことや学んだら良いこと、また学年レベルを超えて高度な水準に進むことは学年が進行するにつれて、今後の社会では大いに必要になり可能でもあるだろう。そのための時間を確保しさらにアクセス可能性を高める必要がある。

7. 小学校低中学年の授業時間のあり方について

○以上を踏まえながら、小学校低中学年の授業時間の配分の可能性について考えてみたい。もとよりすべてのニーズにまんべんなく十分に対応するというのは困難である。時間は極めて限られた資源であり、しかも学校の授業時間を徒に増やすことは自由に行う家庭や学校外での活動をますます狭くすることになり、それが個々の子どもの将来に向けた選択肢として好ましいのかどうか疑問が大きくなりつつある。

○例えば、こういう原則を立てられないであろうか。その配分にあたっては学校・クラス・個々の子どもごとの柔軟な配慮が不可欠になるだろう。

1) 学級にいることの安心感と楽しさを確保する活動の時間。

2) 必要な知識・技能・態度などを確保する共通の一斉授業を中心とする時間の最低限の確保。

3) 子どもが教師と相談しつつ(一斉学習との関連を自覚的にして)小集団で学ぶ時間。

4) 子どもが教師と相談しつつ(その子どもの学びの履歴・地図を共有して)個別に選ぶ学

ぶ時間。

- 5) ドリル学習（授業時間、放課後、家庭学習などにおいて）。
- 6) 自由に自分の好きなことを学び追究する時間（家庭や学習センターなどにおいて）

8. 小学校中高学年への授業の展開のあり方とは

○低学年教育を受けて、特に中高学年で大事なことは以下のようなことであろう。

- 1) 教科等の見方・考え方の理解に向けて、少しずつその内容をその中核的な概念による説明へと指導を図る。
- 2) 体験活動（日常体験や観察や実験等を含めて）と教科の内容との関連づけを自覚的に行えるように指導をする。
- 3) 各教科等における分かること・できるようになることの喜びを味わうことを大事にする。
- 4) 主体的・対話的で深い学びへの指導が授業の中心となる。同時に習得の学習についての自学を定着させる。
- 5) 学習の多様な方略を使い分け組み合わせることを自覚的に行い、学習の自己調整活動を可能にしていく。
- 6) そのためにも個々の子どもの学びの地図を描き、教師と子どもがそれを共有しながら、それぞれの子どもの学習の計画を立て、さらに実施の場を広げる。
- 7) 高学年では特に、深い学びへと導くために教師の教科等の専門性を高めていく必要がある。専科教員の導入や中学校との連携・一貫、専門的な補助員の導入、専門的な研修等の方策が必要となろう。